

中学生のアタッチメントと学業的探索に関する研究
——親子間アタッチメントの安定性とラーニング・ゴール、
知的好奇心との関連——

松 岡 陽 子*

Attachment and Academic Exploration in Early Adolescence:
The Relations of Attachment Security to Learning Goal and Curiosity

Yoko MATSUOKA

Abstract

The aim of the present study is to clarify direct associations between the security of adolescent-parent attachment and exploratory factors; learning goals and curiosity, examining the effects of internal working models (IWM) and some of other potentials.

The total number of participants were 93 public junior high school students from first to third grades in Tokyo. They were administered self-report measures containing attachment security, IWM styles (secure/ambivalent/avoidant), self-esteem, peer-orientation, learning goal tendency, and curiosity.

Regression analyses represented that attachment security would have a strong influence both on learning goal tendency and on curiosity. Self-esteem was found to have a relation only to learning goal tendency. In contrast, IWM styles as well as peer-orientation were not significantly associated with learning goal or curiosity. These findings might indicate that the quality of a particular attachment relationship, rather than representational attachment (i.e., IWM styles), facilitates an adolescent's day-to-day academic exploration. This study suggests that the secure base concept could be applied to an adolescent sample.

Key words: Attachment, Learning goal, Curiosity, Exploration, Secure base

*助手 発達心理学

問題と目的

Bowlby-Ainsworth のアタッチメント (attachment ; 愛着) 理論は、アタッチメント関係あるいはアタッチメント対象がもつ安全基地 (secure base) としての役割を重視する (Bowlby, 1969/1982, 1988; Ainsworth, Blehar, Waters, & Wall, 1978)。アタッチメント対象 (主要な養育者) への安定したアタッチメントは、子どもの探索の基盤になるというのである。子どもにとって新奇な事象は、好奇心や興味とともに不安や恐怖を引き起こす存在であるが、アタッチメント対象を安全基地とすることで、子どもは安心して環境の探索に向かえる。これはつまり、子どもがアタッチメント対象への近接維持システムによって保護される一方、探索を通して環境について学習していけるように、アタッチメント、探索の両行動システムが相補的な性質をもって進化してきたためであると説明される。

1 歳児のアタッチメント・パターン測定法として知られるストレンジ・シチュエーション (the strange situation; Ainsworth *et al.*, 1978)¹⁾ も、アタッチメント行動とともに探索行動が活性化するようにデザインされている。そこでの観察の基準は、「アタッチメント—探索のバランス」(Ainsworth, Bell, & Stayton, 1971) であるともいえる。安定したアタッチメントをもつ secure (安定) 型の乳児は、養育者が近くにいれば、その養育者を安全基地として積極的な探索行動を行うが、不安定なアタッチメントをもつ insecure (不安定) 型乳児の場合はそうではない。Insecure-ambivalent (不安定—両価) 型の乳児の場合、たとえ養育者が近くに存在してもその探索行動は乏しく、insecure-avoidant (不安定—拒否) 型の乳児は、養育者との分離・再会時にもそれを無視してひとり遊び (探索) をする傾向にある。

たとえば avoidant 型乳児と secure 型乳児の探索には、単純に活動量からみれば差がない。改訂版ストレンジ・シチュエーションにおいて avoidant 型とされた乳児の探索は、むしろ secure 型乳児のそれより活発であったという報告さえみられる (Harmon, Suwalsky, & Klein, 1979)。しかし、両者の探索は同様に好奇心や興味に動機づけられたものであろうか。またその先、つまり探索を通じた学習は、新たな知識や技能の獲得、習熟を含むものであろうか。Ainsworth によれば、avoidant 乳児を中性的な事物の世界へと向かわせるのはアタッチメント対象を拒否する傾向であると解釈でき (Ainsworth *et al.*, 1978 ; 繁多, 1991), Main によれば、事物への注意が彼らの自己の組織化を支えるのではないかという (Main, 1981; Main & Wetsen, 1982; Maslin-Cole & Spieker, 1990 の内)。つまり乳児のアタッチメント・パターンによる探索の差異は、まず「知識獲得への取り組み方 (style)」あるいは「外界へのアプローチのスタイル」(繁多, 1991) に着目することでより明確にみえてくると考えられる。そしてこのこ

とは、探索的行動の質的な面に注目した Main (1983) や Matas, Arend, & Sroufe (1978) の研究などからも示唆されよう。1歳時に *seucre* であるとされた子どもは *insecure* であった子どもよりも、2歳前後の時点で、困難な課題への積極性、遊びの持続性や創造性の高さを示したり (Matas, Arend, & Sroufe, 1978)、遊び中に肯定的な感情をあらわし、おもちゃの様々な側面を探ろうとした (Main, 1983)、という報告である²⁾。アタッチメント・パターンによるそのような行動上の差異は、おそらくは彼らの探索への動機の違いによって説明されるであろうと考えられる。

また、アタッチメント対象がただ物理的に子どもを近くでみまもっているかどうか—それは安全基地としての役割に必ずしも重要でないことがわかる。子どもがその対象を十分に応答的 (*responsive*) で利用可能 (*available*) であるとみなしている、すなわち安全感 (*felt security*; Sroufe & Waters, 1977) を得ている状態でなければ、いくらアタッチメント対象が子どもの近くにいても、安全基地としては十分に機能しない。反対に、アタッチメント対象との物理的な近接を要せずに安全感をもつことも可能である。それゆえアタッチメントの質が問題となるのである。そしてこの安全感という概念の使用により、「アタッチメント—探索」の議論はその対象を乳幼児期以降に拡大しうる。つまり、発達に伴ってアタッチメントの様相が変化しようとも、アタッチメントの安全基地としての機能を検証することが可能となる。Hazan & Shaver (1987) 以降、成人を対象としたアタッチメント研究が盛んであるが、実際に、それらの中にもアタッチメントと探索の関連を扱うものがいくつかみられる (たとえば, Hazan & Shaver, 1990; Green & Campbell, 2000)。Hazan & Shaver (1990) は、成人の場合のアタッチメント対象を恋人とみなし、探索を仕事活動に対応させて、アタッチメント・パターンと、仕事活動の様々な側面との関係を探っているが、ここでもまた、仕事活動への取り組み方あるいは動機づけというべきところにアタッチメント・パターンとの関連が示されている。

松岡・青柳・斎藤 (2001) は、中学生の中心的活動である学業への取り組み方—何を目的に勉強するのか—を達成目標 (*achievement goals*; Dweck, 1986, 1999; Hayamizu, Ito, & Yoshizaki, 1989)²⁾ という動機づけの枠組みから捉え、これと主要な養育者 (ここでは、母親) に対するアタッチメントとの関連について、「アタッチメント—探索」の観点から検討している。その結果、アタッチメント—探索に対応する形で、アタッチメントの安定性が「自己の能力の拡大」を目指すラーニング・ゴール (LG) の傾向に関わることを示した。LG は内発的動機づけ (*intrinsic motivation*) や習熟的動機づけ (*mastery motivation*) とともに非常に近い概念であり、その目標である「能力の拡大」には新たな技能の獲得、新たな課題の習熟、新たなものの理解が含まれる (Dweck, 1999)。すなわち、母親へのアタッチメントが安定しているほど、学習の

プロセス自体を学業の達成目標とする傾向が高かったのである。しかし、松岡ら（2001）自身も述べているが、この結果はただちにアタッチメントと探索との直接的関連を意味するものではない。アタッチメントの安定性と LG 傾向には、理論的に潜在する媒介、関連要因が複数考えられるからである。

それらのひとつとしてまず考えられるのは、乳児期の養育者（代表的なのは、母親）との相互作用を通して形成され、やがて一般的な対人関係のモデルとして象徴的に機能するようになるといわれる自己および他者に関する表象—インターナル・ワーキング・モデル（internal working models; IWM）—である。この考えが正しいとすれば、中学生が現在もつ特定の対象（親）へのアタッチメントも単に IWM が反映されたものであるから、LG 傾向に対して真に影響をもつのはむしろ IWM ということになる。また理論的には IWM とも重なる部分が多いが、アタッチメントは自己（self）や、仲間や教師といった親しい他者との関係にも影響するといわれ（たとえば、Brennann & Bosson, 1998; Sroufe, Fox, & Pancake, 1983）、同時に、それらは LG と関連することも指摘されている（たとえば、Dweck, 1999; Ames, 1992）。よって、たとえば自尊感情（self-esteem）、学校での仲間志向などは、このアタッチメント安定性—LG 傾向を潜在的に媒介している可能性がある。アタッチメントと探索との直接的関連、すなわち探索の基地としてのアタッチメントの機能を検証することを目指すならば、上記のようなアタッチメント—LG を介在する可能性の高い要因を含めた上で、改めて両者の関連を検討しなおさなければならないだろう。

以上をうけて、本研究ではまず、松岡ら（2001）でみられたアタッチメント—LG の関連を、両者の潜在的な媒介あるいは関連要因の影響を考慮しながら、改めて検証することを目的とする。両者を介在する可能性のあるものとして、ここでは IWM、自尊感情、仲間志向を取り上げる。それらを含めた検討によって、アタッチメントと LG とのより直接的な関連について言及したい。また今回は、学業場面での探索動因として「知的好奇心」を取り上げ、LG と同様、それとアタッチメントとの関係について、加えて検討する。このことにより、アタッチメントの安定性が関わる学業的探索の動機づけ的側面について、さらに広い見解が得られるであろう。本研究のようにアタッチメント関係の安全基地機能、もしくはそこからえられる安全感に注目するならば、過去の親子関係やもっと一般化された表象ではなく、「現在の、ある特定の対象との関係」におけるアタッチメントを問題としなければならない。青年のアタッチメント対象については議論の余地が大きいものの（たとえば、Hazan & Zeifman, 1994）、本研究で扱う中学生のアタッチメント対象は、松岡ら（2001）に準じ、彼らの主要な養育者という意味から「親」に限定して論じることとする。

方 法

1. 調査対象者

東京都内の公立A中学校生徒、95名。うち、有効回答は93名分であった。学年・性による内訳は、1年生31名（男子19名、女子12名）、2年生30名（男子15名、女子15名）、3年生32名（男子19名、女子13名）。

2. 調査の手続きおよび内容

無記名による質問紙調査を、各学年1学級に対して集団で実施した。調査用紙の配布・回収は各学級の担任教師が行った。調査時期は2002年1月であった。調査内容は以下のとおりである。なおリッカート式の回答部分は、対象者の混乱を避けるために「1. 全くそう思わない」から「5. とてもそう思う」の5件法で統一された。

a. アタッチメントの安定性

松岡ら（2001）の14項目を使用した。この項目群は、「安全基地」または「防壁（safe haven）」（Bowlby, 1969/1982）の概念に基いて作成され、アタッチメントの安定性（安定—不安定）に関する1因子構造を示している（松岡ら、2001）。使用にあたっては、対象者にまず「家で、あなたにとっていちばん身近なおとな（あなたの世話をしてくれたり、話したりする人）はだれか」と問い、その人物との関係を想定して回答するよう求めた。本研究でも松岡ら（2001）と同様に、この設問で選択された人物を彼らの主要な養育者と考え、その人物を彼らのアタッチメント対象として扱うことにした。

以上14項目について主因子法による因子分析を行った結果、アタッチメントの安定性とみられる1因子構造が確認されたが、第5項目（「わたしは、——がどこかへ行ってしまうような気になることがある」）は負荷量が.19と低かった。よって、この第5項目を除く13項目を分析対象とした。 α 係数は.90であった。

また、「主要な養育者」として挙げられた対象は、「母親」が75.3%（70名）と最も多く、次いで「父親」（14.0%；13名）が多かった。その他、「両親」を挙げた者が4名、「祖母」、「姉」が各1名、残りの3名は対象不明か無回答であった。

b. IWM スタイル

「一般的な他者」との関係における自己および他者に関する認識（＝IWM）のスタイル（secure/ambivalent/avoidant）を測定するために、戸田（1988）により作成された内的作業モデル（インターナル・ワーキング・モデル）尺度を使用した。これは、各スタイルに対応した、内的一貫性の高い3下位尺度から構成されている。Secure尺度は「私はすぐに知り合いがで

きやすい方だ」,「気軽に頼ったり頼られたりすることができる」,などの計6項目, ambivalent 尺度は「人は本当はいやいやながら私と親しくしてくれているのではないか」,「自分を信用できないことがよくある」,などの6項目,そして avoidant 尺度は「私は人に頼らなくても,自分ひとりでじゅうぶんにうまくやっていけると思う」,「あまりにも親しくされたり,こちらが望む以上に親しくなることを求められたりすると,イライラしてしまう」,などの6項目からなる。ただし,この尺度はもともと大学生以上の成人を対象に作成されているため,本研究の対象である中学生の年齢に合わせ,表現の一部を容易にした上で使用した。表現に変更を加えたのは次の2項目,各1箇所であった—Ambivalent 第5項目「私はいつも人と一緒にいたがるので,ときどき人から疎んじられてしまう」を「—,ときどき人から遠ざけられてしまう」へ, avoidant 第6項目「どんなに親しい間柄であろうと,あまりなれなれしい態度をとられると嫌になってしまう」(オリジナル)を「どんなに親しい人との間でも,—」へ。

本研究対象者が本来の測定対象年齢より低かったことから,主因子法・プロマックス回転による因子分析を行い,因子構造の確認を行った。その結果,ほぼ従来どおりの3因子が抽出されたが, avoidant 項目のひとつと予想された「人は全面的には信用できないと思う」は,むしろ secure 因子への負荷量を高く示した。よって,この項目は avoidant 項目としても secure 項目としても採用されず,以降の分析から除かれた。Secure 尺度(6項目), ambivalent 尺度(6項目), avoidant 尺度(5項目)の α 係数は,それぞれ .84, .77, .63であった。

c. 自尊感情

10項目からなる自尊感情尺度(Rosenberg, 1965)の邦訳版(星野, 1970)を使用した。ただし「私は少なくとも自分が他人と同じレベルに立つだけの価値がある人であると思う」という項目については,山本・松井・山成(1982)の邦訳版から一部引用し,「わたしは,少なくとも人なみには,価値のある人間だと思う」と変更して使用した。 α 係数は .75であった。

d. 仲間志向

中高生を対象として作成された二宮・大野(1990)の学校生活に対する意識の尺度の中から,仲間志向(—孤立志向)尺度を使用した。この尺度は「友だちと一緒にいると楽しい」,「友だちにはあまり大事なことは話さない」(逆転項目),などの11項目からなり,得点が高いほど仲間との連帯を求める仲間志向の強さをあらわす。 α 係数は .86であった。

e. LG 傾向

中学生の学業に関する達成目標傾向尺度(Hayamizu *et al.*, 1989; 速水・伊藤・吉崎, 1989)の中から,ラーニング・ゴール傾向尺度を使用した。この尺度は,勉強する理由として「むずかしいことに挑戦することが楽しいから」,「問題をとくことがおもしろいから」,などを含む

9項目からなり、学習のプロセス自体を楽しむことを学業活動の目標とする傾向を測定する。 α 係数は.93であった。

f. 知的好奇心

桜井・高野（1985）の内発的—外発的動機づけ測定尺度の中から、拡散的知的好奇心に関する部分を使用した。桜井・高野（1985）では、強制二者択一法により、内発的あるいは外発的な動機づけ傾向を示す選択肢のいずれかを選択させているが、本研究では内発的な動機づけ、すなわち知的好奇心の高さをあらわす5項目のみを用い、他の尺度と同様にリッカート式で回答を求めた。これら5項目は「いろいろなことを、進んで勉強したい」、「いつでも、できるだけたくさんを知りたいと思う」などを含み、 α 係数は.80であった。

結果・考察

本研究の目的に則し、主要な養育者（アタッチメント対象）として「母親」または「父親」を挙げた計83名のみを対象とし、本研究で扱う全得点における「母親」、「父親」両群の差をみるためのt検定を行うこととした。それらに差異がみられなければ、両群を合わせた上でそれ以降の分析を行うが、両群の差異が認められた場合には、人数的な限界をもつ「父親」群（13名）を以降の分析の対象外とし、「母親」群（70名）についてのみ検討を進めることにした。

1. 対象選択の違いによる得点差

アタッチメント対象（主要な養育者）の違い（「母親」群／「父親」群）によって、アタッチメント安定性、IWMスタイル（secure/ambivalent/avoidant）、自尊感情、仲間志向、LG、知的好奇心の各得点に差がみられるかどうかを調べるために、t検定を行った。その結果、IWM_ambivalentおよび自尊感情得点において群間の差が認められた。IWM_ambivalent得点では「父親」群の平均が有意に高く（ $t = |2.46|$, $df = 15.2$, $p < .05$ ）、反対に、自尊感情得点では「母親」群の平均が有意に高かった（ $t = |3.62|$, $df = 21.2$, $p < .01$ ）。すなわち、「父親」群は「母親」群に比して、他者との関係や自分自身にあまり自信をもてず、自己の価値を低く感じている。これを「母親」群の特徴としてあらわせば、彼らは「父親」群の者よりも自信があり、自分自身を高く評価しているともいえる。

このような両者の特徴は、青年のアタッチメントあるいはアタッチメント対象について考える上で重要な示唆をもつかもしれない。上の結果は、主要な養育者として誰を挙げるかの違いが、その対象へのアタッチメントの安定性そのものではなく、IWMスタイルや自尊感情での差にあらわれているという意味でも興味深い。それだけにこの点に関する解釈は様々に可能

である。本研究のように、青年が現在もつ特定の対象との関係からアタッチメントを問題にしようとする場合、その対象のもつ性質、あるいはその対象と青年との関係が含む性質をより詳細に考慮する必要があるといえる。しかし、本研究からはそうしたことを知り得ないため、この点に関しては今後の重要な検討課題としたい。

以上から、主要な養育者として誰が選択されるか（「母親」／「父親」）によって IWM スタイルの一部や自尊感情の高さに差がみられることが示されたため、以降、「母親」群のみを対象として分析を行い、その結果について検討を進める。

2. 尺度間の相関（母親群について）

アタッチメント安定性、IWM スタイル（secure/ambivalent/avoidant）、自尊感情、仲間志向、LG、知的好奇心の各得点をもとにピアソンの積率相関係数を算出した。結果は表 1.のとおりである。これよりまず、アタッチメント安定性と IWM 各スタイルの間には有意な相関がみられなかったことがわかる。またアタッチメント安定性は、自尊感情や仲間志向との間にも有意な相関を示さなかった。一方、IWM スタイルはいずれも、自尊感情または仲間志向と中程度の相関を示した。Secure は自尊感情との間に有意な正の相関を、ambivalent は逆に自尊感情と有意な負の相関をみせており、avoidant は仲間志向と有意な負の相関をみせている。

母親との現在の関係におけるアタッチメントの安定性は、より一般的な他者との関係を扱った IWM とは明確に区別されるべきものであるといえる。これまで理論的にはほぼ一直線上に考えられてきた人生初期の母親とのアタッチメントと、一般的な対人関係に関する IWM、そして青年と母親とのアタッチメントの質は、それほど単純な一貫性をもつものではないということが示唆される。少なくとも青年期初期において、一般的な対人関係に関する IWM スタイルと母子間アタッチメントの安定性（から得られる安全感）は、「アタッチメント」のかなり異

表 1 尺度間相関

	1 アタノチメント安定性	2 IWM_Se	3 IWM_Am	4. IWM_Av	5 自尊感情	6 仲間志向	7 ラーニング・ゴール
アタノチメント安定性							
IWM_secure	-.07						
IWM_ambivalent	.20	-.04					
IWM_avoidant	.12	.05	.11				
自尊感情	-.12	.48**	-.53**	.10			
仲間志向	-.01	.14	-.12	-.68**	-.07		
ラーニング・ゴール	.32**	.22	.06	.10	.32**	-.06	
知的好奇心	.40**	.09	.10	.29	.14	-.20	.68***

p < .01, *p < .001

なる位相を反映しているとみるのが妥当であろう。さらに、IWMの各スタイルが、アタッチメントの関連要因としてしばしば取り上げられる自尊感情や仲間関係の指標（ここでは「仲間志向」）に対して妥当な相関関係を示したのに対し、アタッチメントの安定性はそれらとの関連を特に示さなかったことを考え合わせると、松岡ら（2001）や本研究が扱った「青年と親（母親）との間の現在のアタッチメント」は、従来の青年や成人を対象としたアタッチメント研究の多くが取り上げてきた「アタッチメント」とは異なる部分に焦点を合わせたものであることがうかがえる。

またLGと知的好奇心との間には、高い相関がみられているが、これには、学業への内発的動機づけを安定的、傾性的に捉えようとする両者の共通性があらわれていると考えられる。

3. アタッチメント安定性とLGとの関連（「母親」群について）

LGに対するアタッチメント安定性、またIWM各スタイル、自尊感情、仲間志向の影響を検討するため、LGを従属変数とし、第1ステップにてコントロール変数（性・学年）、およびアタッチメント安定性以外の全変数を投入、第2ステップにてアタッチメント安定性を順次投入する階層的重回帰分析を行った（表2. 参照）。その結果、第1ステップで投入された変数はすでに有意な説明力をもち、コントロール変数のひとつの学年、また自尊感情において有意な正の回帰がみられた（それぞれ、 $\beta = .26$, $p < .05$; $\beta = .45$, $p < .01$ ）。続く第2ステップでは、アタッチメント安定性の追加投入によって14 %説明率が上がり、アタッチメント安定性は $\beta = .41$ ($p < .001$) という回帰を示した。したがって、学年が上がるほど、自尊感情が高いほど、あるいはアタッチメントの安定性が高いほど、LG傾向は高くなるということがわかった。

表2. LG、知的好奇心を目的変数とする重回帰分析結果（標準偏回帰係数と重相関係数(R)）

	LG		知的好奇心	
	step 1	step 2	step 1	step 2
性	.01	-.11	.02	-.11
学年	.26*	.30**	.13	.17
IWM_secure	.02	.07	-.02	.03
IWM_ambivalent	.29	.21	.19	.11
IWM_avoidant	.06	-.01	.24	.17
自尊感情	.45**	.42**	.23	.21
仲間志向	-.00	.04	-.04	-.08
アタッチメント安定性		.41***		.44***
R^2	.22	.36	.14	.30
F	2.45*	4.21***	1.38	3.15**

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

松岡ら（2001）と同様、アタッチメントの安定性はLGに対して強い関連をもつことが本研究でも示された。アタッチメントが安定している者ほど、いいかえれば、現在の母親との関係において「安全感」を強くもつ者ほど、「能力の拡大」を前提に学習のプロセスそのものを楽しむという目標をもって学業に向かいやすい。自尊感情もアタッチメントと同様にLG傾向への強い関連をみせているが、第2ステップにてアタッチメント安定性を投入後も自尊感情の回帰係数にほとんど変化がなかった上の結果と、2.においてアタッチメントと自尊感情の間には有意な相関がみられなかったことから、アタッチメントの安定性は自尊感情とは独立に、LG傾向に影響を与えていると考えられる。

これを受けて、LGと自尊感情との関連についても触れておく。上述したとおり、自尊感情はアタッチメントとは独立的にLGとの関連をなしているとみられる。LGとはそもそも自己の能力の拡大を目指す目標であり、これを志向する根底には能力を可変的なものとみなす能力の増大観（incremental theory）があるという。そしてLGを志向する者は困難や失敗に直面しても習熟志向反応を示し、無力感に陥りにくい（Dweck, 1986, 1999）。そうしたLGに伴う自己の能力の拡大可能性に対する信念が自尊感情の高さと結びつくのは妥当な結果であろう。

LGには学年との関連もみられた。学年が進むほど、学習のプロセスそのものを楽しむことを目標に勉強する傾向が高かったのである。このことは、高校受験のプレッシャーなど、多くの中学生が抱える現実と照らし合わせると、一見、それに矛盾するような結果である。松岡ら（2001）では同様の結果がみられていないことから、本研究の調査が行なわれた1月という時期がこの結果に反映された可能性がひとつには考えられる。1月といえば、ほとんどの中学3年生にとっては高校受験を控えた、あるいはそれを終えて間もない時期である。たとえば、そうした時期にある彼らの学業に対する意識の高まりや変容が、何らかの形でこの結果にあらわれたとすれば興味深い、その詳細は本研究からは明らかでない。この点は本研究の主題とは離れるが、中学生の学業に関するLG傾向を扱う上では無視のできない、さらに検討の必要な部分である。

一方、IWMはLGと関連を示さなかった。この結果から、上（結果・考察2.）ですでに触れたように、IWMは母親へのアタッチメントの安定性とはかなり異なる「アタッチメント」の位相を反映しているということに加え、その機能にも違いをもつということが示唆される。

仲間志向もLGとの関連を示さなかった。マスタリー・ゴール（LGに対応）には、教師の子どもへの関わり方をはじめとする教室環境における複数の要素が大きな影響を与えている可能性が指摘されている（Ames, 1992）。今回は、そのようなものの中から仲間関係、さらにそのひとつの要素の仲間志向を取り上げてみたが、教室環境には他にもアタッチメント—LGを媒

介するような潜在的な要因が複数あると考えられる。今後、そうした要因を取り上げて、それらの影響について改めて検討してみることも必要であろう。

4. アタッチメント安定性と知的好奇心との関連（「母親」群について）

知的好奇心に対するアタッチメント安定性、IWM 各スタイル、自尊感情、仲間志向の影響を検討するため、知的好奇心を従属変数として3. と同様の重回帰分析を行った（表2. 参照）。その結果、第1ステップで投入された変数は有意な説明力をもたなかったが、第2ステップにおけるアタッチメント安定性の投入によって説明力は16%上昇し、有意となった。この第2ステップにおいて、アタッチメントの安定性のみが有意な正の回帰を示した（ $\beta = .44$, $p < .001$ ）。

よってここで、LG に対してのみでなく、知的好奇心に対してもアタッチメントの安定性は強い関連をもつことが示された。本研究で扱ったのは特に、「たくさんのことを知りたい」とか「できるだけ多くのことを勉強したい」といった拡散的な知的好奇心である。したがって、母親との関係において「安全感」を得ている者ほど、学業活動に関する場面で広く好奇心をもちやすいといえ、探索の機会を多くもつ可能性がある。

LG との関連をみせた自尊感情であるが、知的好奇心との関連は示さなかった。学業活動場面でいろいろなことに対して好奇心をもつという傾向には、自尊感情は特に関わりをもたないようである。また、IWM および仲間関係は、LG と同様にこの知的好奇心にも関連を示さなかった。

5. 中学生のアタッチメントと学業的探索について：まとめと今後の課題

本研究では、中学生の母親に対するアタッチメントの安定性、あるいはそこから得られる安全感が、LG 傾向および知的好奇心の高さに強い関連をもっていることが示された。アタッチメントと LG もしくは知的好奇心との間に潜在し、この関連に影響を与えうる要因のいくつか—IWM, 自尊感情, 仲間志向—を取り上げ、それらの影響について合わせて検証することによって、アタッチメントと、学業的探索の動機づけとの関連が直接的であることを、松岡ら（2001）の場合に比べ、より明確に示すことができたと考える。

アタッチメント理論における安全基地の概念は、本来、その理論の中核をなす重要なものであり、乳児を対象としたアタッチメント研究では、アタッチメント—探索の関連はアタッチメントの質（パターン）の指標ともなるものである。しかし乳幼児期を超えて、青年や成人のアタッチメントが取り上げられる場合には、彼らが現在もつ特定の対象へのアタッチメント関係はあまり重視されず、その安全基地としての機能もあまり問題とされない傾向があった。本研究はそれらに着目し、アタッチメント理論が強調するアタッチメント—探索の関連、いいかえ

れば、アタッチメントの安全基地機能が、青年（中学生）の母子関係と学業的探索についてもあてはまる可能性を改めて支持している。

しかし、本研究で取り上げたLGと知的好奇心はともに、あくまで学業的探索の「動機づけ」の側面にとどまるものである。さらにそれらは、全般的な学業活動における傾性的な内発的動機づけに言及したものであることに注意したい。この動機づけが実際の探索「行動」にどのような形でつながっていくのか、全般的な学業活動というものが青年にとっての「探索」をとらえる場面としてもっとも適した唯一のものかどうかなど、青年（中学生）の「アタッチメント—探索」関連をさらに明確にしていくために、実証的に検討すべき課題は幅広くある。

最後に、今回、人数的な制限により主要な分析および考察の対象から除外された、「父親」群をはじめとする青年たちのアタッチメントと探索に関する検討は、青年のアタッチメントそのものを探るという意味においても重要であり、次に取り組むべき課題のひとつであることを述べておきたい。

注

- 1) ストレンジ・シチュエーション (the strange situation; Ainsworth *et al.*, 1978) は、実験室という乳児にとって見慣れぬ環境で、養育者との分離・再会場面を繰り返すことによってアタッチメント行動システムを活性化するとともに、おもちゃを配置して探索行動システムを活性化するようにデザインされた実験法である。実験は、ストレンジャー（若い女性）の入退室も組み込んだ計8つのエピソードから構成される。そこでの行動特徴をもとに乳児のアタッチメント・パターンが3つまたは4つのうちのひとつに分類されるが、こうしたパターンにはそれまでの乳児—養育者の相互作用の質が反映されるとみられている。詳細はたとえば、斎藤（1991）の「アタッチメント行動のパターン」（繁多・青柳・田島・矢澤（編）、「社会性の発達心理学」，第2章3節（pp. 40–45））を参照していただきたい。
- 2) これらの研究は、乳児期のアタッチメントとその後の発達をみたもので、厳密に言えば、探索への安全基地としてのアタッチメントの機能をみたものではないが、同一対象へのアタッチメントの質は乳幼児期を通して比較的安定（一貫）していると考えられている。
- 3) Dweck（1986）の提唱した達成目標は、LGとパフォーマンス・ゴール（PG）の2種類である。彼女は、これら2種類の達成目標により、困難な課題や失敗に直面したときの反応パターンの違いを説明する。すなわち、LGを志向する者にとっての目標は能力を伸ばすことであるから、彼らは達成場面で困難や失敗に直面しても、能力に対する自信の高低に関わらず習熟志向反応を示すが、PG志向の者が達成場面で困難や失敗に直面した場合、現在の能力への自信が低ければ、否定的な評価を避けるために無力感反応を示すという。LG志向、PG志向の根底には、それぞれ能力の増大観（incremental theory）、能力の実体観（entity theory）があるとされる。

引用文献

- Ainsworth, M.D.S., Bell, S.M., & Stayton, D.J. 1971. Individual differences in Strange-Situation behavior of one-year-olds. In H.R.Schaffer (Ed.), *The origins of human social relations*, pp. 17–52. Academic Press.
- Ainsworth, M.D.S., Blehar, M.D., Waters, E., & Wall, S. 1978. *Patterns of attachment: A psychological study of the strange situation*. Erlbaum.
- Bowlby, J. 1969/1982. *Attachment and loss: Vol. 1. Attachment* (2nd ed.). Basic Books.
- Bowlby, J. 1988. *A secure base: Parent-child attachment and healthy human development*. Basic Books.
- Brennann, K.A. & Bosson, J.K. 1998. Attachment-style differences in attitudes toward and reactions to feedback from romantic partners: An exploration of the relational bases of self-esteem. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 24, pp. 699–714.
- Dweck, C.S. 1986. Motivation processes affecting learning. *American Psychologist*, 41, pp. 1040–1048.
- Dweck, C.S. 1999. *Self-theories: Their role in motivation, personality, and development*. Psychology Press.
- Green, J.D. & Campbell, W.K. 2000. Attachment and exploration in adults: Chronic and contextual accessibility. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 26, pp. 452–461.
- 繁多 進. 1991. アタッチメントとその後の人間関係. 繁多 進・青柳 肇・田島信元・矢澤圭介 (編), *社会性の発達心理学*, pp. 108–122. 福村出版.
- Harmon, R.J., Suwalsky, J.D., & Klein, R.P. 1979. Infants' preferential response for mother versus an unfamiliar adult. *Journal of the American Academy of Child Psychiatry*, 18, pp. 437–449.
- Hayamizu, T., Ito, A., & Yoshizaki, K. 1989. Cognitive motivational processes mediated by achievement goal tendencies. *Japanese Psychological Research*, 31, pp. 179–189.
- 速水敏彦・伊藤 篤・吉崎一人. 1989. 中学生の達成目標傾向, 名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学), 36, pp. 55–72.
- Hazan, C. & Shaver, P.R. 1987. Romantic love conceptualized as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, pp. 511–524.
- Hazan, C. & Shaver, P.R. 1990. Love and Work: An attachment-theoretical perspective. *Journal of Personality and Social Psychology*, 59, pp. 270–280.
- 星野 命. 1970. 感情の心理と教育 (一, 二), *児童心理* 24, pp. 1264–1283, pp. 1445–1477.
- Main, M. 1981. Avoidance in the service of attachment: A working paper. In K. Immelmann, G. Barlow, L. Petrino, & M. Main (Eds.), *Behavioral Development: The Bielefeld Interdisciplinary Project*, pp. 651–693. Cambridge University Press.
- Main, M. 1983. Exploration, play, and cognitive functioning related to infant-mother attachment. *Infant Behavior and Development*, 6, pp. 167–174.
- Main, M. & Weston, D.R. 1982. Avoidance of the attachment figure in infancy: Descriptions and interpretations. In C.M. Parkes & J. Stevenson-Hinde (Eds.), *The Place of Attachment in Human Behavior*, pp. 31–59. Basic Books.
- Maslin-Cole, C.A., & Spieker, S.J. 1990. Attachment as a basis for independent motivation. In M. Greenberg, D. Cicchetti, & E. Cummings (Eds.), *Attachment in the Preschool Years: Theory, Research, and Intervention*, pp. 245–272. University of Chicago Press.
- Matas, L., Arend, R.A. & Sroufe, L.A. 1978. Continuity of adaptation in the second year: the relationship

- between quality of attachment and later competence. *Child Development*, 49, pp. 547-556
- 松岡陽子・青柳 肇・斎藤富由起. 2001. 中学生の学業達成目標とアタッチメントの関連について—“アタッチメント—探索”の視点から—, *母子研究*, 21, pp. 97-104
- 三宮克美・大野 久. 1990. 学校生活における青年. 久世敏雄 (編), *変貌する社会と青年の心理*, pp. 157-182. 福村出版.
- Rosenberg, M. 1965. *Society and the adolescent self-image*. Princeton Univ Press
- 桜井茂男・高野清純. 1985. 内発的—外発的動機づけ測定尺度の開発, *筑波大学心理学研究*, 7, pp. 55-60.
- Sroufe, L A, & Waters, E. 1977. Attachment as an organizational construct. *Child Development*, 48, pp. 1184-1199.
- Sroufe, L.A, Fox, N E., & Pancake, V.R. 1983. Attachment and dependency in developmental perspective *Child Development*, 54, pp. 1615-1627.
- 戸田弘二. 1988. 青年期後期における基本的対人態度と愛着スタイル：作業仮説 (working models) からの検討, *日本心理学会第52回大会発表論文集*, p. 27
- 山本真理子・松井 豊・山成由紀子. 1982. 認知された自己諸側面の構造, *教育心理学研究*, 30, pp. 64-68.

付 記

調査に協力いただいた中学校の先生方, 生徒の皆様にご心より感謝の意を申し上げます。また, 調査の実施に際して尽力いただいた大正大学の斎藤富由起氏, 本論文作成時に助言をいただいた早稲田大学の青柳肇先生に御礼を申し上げます。